

アートを探求

AICHI
ARTS
CENTER

by 愛知芸術文化センター

AAC Journal

土に関わる 秋山陽

劇場と旅 劇場は旅の目的地／出発点

ビゲロー、日本美術を陰で支えたコレクター

ホフェッシュ・シェクター作品が愛知に初登場

ダンス×生音で奏でる

“夢の劇場”

© Todd MacDonald

Theatre of Dreams

2026年10月16日(金)・17日(土)

ホフェッシュ・シェクター・カンパニー『Theatre of Dreams』

場所／愛知県芸術劇場大ホール

時間／16日(金)13:30～、17日(土)15:00～

料金／16日(金)SS席 8,000円、S席 7,000円、A席 5,000円【A席U25】3,000円、
B席 3,000円【B席U25】2,000円

17日(土)SS席 9,000円、S席 8,000円【S席U25】4,000円、A席 6,000円【A席U25】3,000円、
B席 4,000円【B席U25】2,000円

チケット／発売中

※16日(金)公演は、1階席・2階席に学校団体の鑑賞が予定されています。

※【U25】は公演日に25歳以下対象(要証明書)。

※4歳以下入場不可(13歳以上推奨)。

※演出により舞台の一部が見えにくい場合があります。

※「劇場と子ども7万人プロジェクト」(小・中・高校生招待)対象公演。



詳細は劇場
WEBページで!

2026 AUTUMN

vol. 129

愛知県芸術劇場

パリ・オペラ座など世界中から

作品を委嘱されるアーティストの代表作

英国を拠点に、パリ・オペラ座など世界の名門カンパニーから委嘱を受け続ける振付家ホフェッシュ・シェクター。身体の内側から湧き起こる本能的でリズムカルな動きと、うねりを起こすかのようなダイナミックな群舞で、独自の作風を築いてきました。『Theatre of Dreams』は、12人のダンサーと3人のミュージシャンが、原始的でリズムカルな群舞から、クラブで踊る若者たちを思わせる享樂的なダンスまで、多彩な場面が次々と展開します。短い動画を連続して見るように、張り詰めた緊張が一転してユーモラスな光景へと変わり、高揚、不穏さ、孤独、熱狂といった異なる感覚が目まぐるしく交錯します。

本作は2024年の初演以来、パリやロンドンをはじめ各地で高い評価を獲得し、25年にはイギリス演劇界で最も権威ある賞と言われる「ローレンス・オリヴィエ賞」のベスト・ニュー・ダンス・プロダクションにノミネートされました。振付と音楽を自ら手掛けるシェクターの“体感型サウンド”は、身体の動きと緊密に呼応しながら、群舞のうねりや場

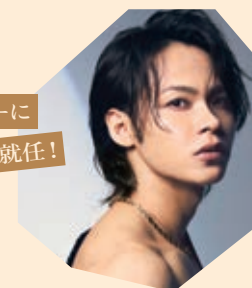
面の緊張を増幅させます。振付と音楽が一体となってつくり出す濃密な世界観が、観客を次第に作品の内部へと引きずり込んでいきます。

愛知県芸術劇場が世界の最前線を紹介してきた流れの中で、約7年ぶりの来日となる本公演は、東海圏の舞台芸術ファンにとって見逃せない節目です。身体と音楽が共鳴し、夢の深層へと誘う90分。夢の断片が立ち上がり、消え、また現れる揺らぎの中で、出演者と一緒に夢の劇場(Theatre of Dreams)を体感してください。

上田竜也が

本公演アンバサダーに

就任!



ホフェッシュ・シェクターは2010年に初来日。2019年には『ポリティカル・マザー ザ・コレオグラファーズ・カット』を上演し、大きな話題となりました。今年、話題作とともに、7年ぶりにシェクターが再び日本へ帰ってくるにあたり、『ポリティカル・マザー ザ・コレオグラファーズ・カット』で主演した上田竜也が、公演アンバサダーを務めます。



コメント&上海公演視察の詳細はこちら!

ビゲロー、

日本美術を陰で支えたコレクター

本展は、明治の日本画の支援者であり、ボストン美術館の日本美術コレクションの礎を築いた大コレクターとして知られるウィリアム・ビゲロー(1850-1926)の没後100年を記念して開催するものです。一度はアメリカに渡り、昭和初期に日本に戻った肉筆浮世絵を中心とするビゲロー旧蔵の美術作品や、ビゲローが支援した狩野芳崖、橋本雅邦ら鑑画会周辺で活躍した画家たちによる日本画を展示します。こうした作品とともに、仏教に帰依したビゲローが終生の拠りどころとした園城寺法明院(滋賀県大津市)に残る遺愛の品々をご紹介します。旧ビゲロー・コレクションで現在愛知県美術館が所蔵する橋本雅邦《秋景山水図》を含むゆかりの美術作品・資料を通して、ビゲローの日本美術への愛情と貢献について振り返ります。

愛知県美術館 学芸員 岩間美佳

ビゲロー展の来場記念や

名古屋のお土産に!

MUSEUM
SHOP



常設のミュージアムショップでは、愛知県美術館の所蔵作品のポストカードも販売しています。同時開催の「コレクション展」で展示されている作品もあり、ぜひお立ち寄りください。

2026年10月30日(金)～12月13日(日)

没後100年記念

ビゲロー 幻のコレクションと近代日本画の夜明け
——日本美術に魅せられたボストン人——

場所／愛知県美術館

時間／10:00～17:00 ※金曜～20:00(入場は閉館の30分前まで)

休館日／11月2日(月)、11月16日(月)、11月30日(月)、12月7日(月)

料金／一般1,900円(1,700円)、大学生1,000円(800円)、

高校生800円(600円)、中学生以下無料

※()内は通常前売券および20名以上の団体料金です。

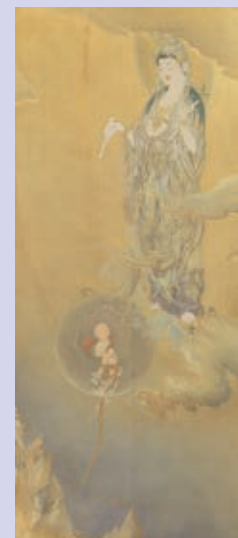
※会期中、一部展示替えをします。

前期 10月30日(金)～11月15日(日)

後期 11月17日(火)～12月13日(日)



詳細は美術館
WEBページで!



重要文化財 狩野芳崖《悲母観音》
明治21(1888)年
東京藝術大学大学美術館蔵【12/1-13展示】

愛知県美術館

本作は愛知県芸術劇場の「劇場ワンダーランド」にて上演された。Null(岡田玲奈・黒田勇)は、2025年から同劇場が推進するアーティスト支援プロジェクト「Constellation～世界をつなげる愛知県芸術劇場ダンスプロジェクト」に参加しており、本作はその成果としても特筆すべき作品であった。

タイトルの「limbo」には「宙ぶらりんの状態」といった意味がある。当日パンフレットには、他者との距離感に葛藤し、「誰か」と「自分」のあいだで揺れ動く心理が綴られていた。

冒頭で床一面に直径1メートルほどの光円が規則的に並ぶ。元NDT(ネザーランド・ダンス・シアター)の照明チーフ・久松タ香によるもので、ゆっくりと明滅している。

そこへ一面だけ板が張られた立方体の金属フレームを抱えた3人が登場する。このフレームは、物理的に他者との間に「距離」を作り出してしまうが、客演の仙石孝太郎を含め、いずれも高い身体能力を持つダンサーたちは孤独で親しみのある関係性を展開していった。

しかし中盤以降フレームは舞台上から消え、直接的に触れ合うダンスが続いていく。倒れそうなダンサーを他の二人が支え、ときにいっしょに転がるなど、徐々に関係性が深まっていく様は胸を打つ。豊かな発想による動きと濃密な関係性が、終始観客を引き込んでいった。

終盤、再び冒頭の光円が床一面に現れる。その後、光円は数を減らす、ダンサーたちが跳躍した先へと次々に増殖していく。世界が開かれていくのだ。そしてラスト、舞台前面から仙石が客席に向かって力強く跳躍した瞬間、暗転し終幕となった。

本作の創作プロセスには、愛知県芸術劇場で3回、Dance Base Yokohama(ともに唐津絵理芸術監督)

で1回という異例の多さのレジデンスと、ワーク・イン・プログレスを重ねてきたことが大きい。その結果、本作はもはや一種の貫禄を帯びるほどの熟成を見せている。

時間をかけて作品を練り上げる機会が現在の日本には極めて少ないが、本プロジェクトにおける彼らの成長は、その重要性を物語っている。地域と劇場、そしてアーティストが共に歩みながら生み出した、幸福で大きな成果といえる。

本作は9月にスロバキア公演を控えている。愛知から世界へと飛躍する姿が、今から楽しみである。

乗越たかおさん Takao Norikoshi
舞踊評論家。『実例解説!コンテンポラリー・ダンス入門』(新書館)など著書多数。現在は国内外の劇場・財団・フェスティバルのアドバイザー、審査員、講座など活躍の場は広い。



© HATORI Naoshi

劇場ワンダーランド Null 新作公演『WITH LIMBO』

2026年5月2日(土)・3日(日・祝)
場所／愛知県芸術劇場小ホール

鑑賞 note

心を揺さぶり、思考が巡る、
その場でしか味わうことのできないもの。
丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

歌川国芳の人気のすさまじい。

このところ毎年、日本のどこかで彼に関連した浮世絵展が開催されている。

そうしたなか、本展は際立つ存在といえる。すべてが個人蔵であること、展示点数が400件にのぼること、初期作から晩年作まで網羅し、錦絵(多色摺版画)のみならず、多数の肉筆画、版木や書簡まで出品され、新発見の作が含まれていることがあげられる。

しかし本展を特徴づけるのは、なにより作品コンディションの素晴らしさにある。展示の大部分を占める錦絵は、江戸時代の大量メディアにあたるため、もともと1点物ではない。当然、複数存在するわけだが、それに比しても、いま摺ってきたばかりのような鮮やかさに衝撃を覚えた。

たとえば団扇絵でいえば、元来、その名のとおり骨に貼って団扇として使用する、いわば消耗品だが、本展に出品されているものの多くは未使用品(おそらく商品見本)である。女性のはっとするような目元の艶やかさ、髪の毛のほつれが生み出す揺らぎ、口元のちょっとした表情、大胆な色彩配置…。良好な摺であるゆえに、細部に宿る国芳の筆力が浮かび上がり、作品の印象すら違ってみえるよう。さらには空や水辺に繊細なグラデーションの重なりが表現された風景画においては、そのあわいにしばし揺蕩う感覚を得るのであった。

展示構成は王道をゆく。「役者絵」「武者絵・説話」「風景」「風俗・情報・資料」「摺物と動物画」「美人画」「肉筆」「戯画」と、主題別に区分された8章から成る。「武者絵・説話」より先に「役者絵」が置かれるなど、他会場と章の順序

が異なるのは、展示空間の制約によるものか。そのうえで、最後を「戯画」で締めくくったのは、ここ近年の国芳に期待されるイメージ、「奇想」「ユーモア」「可愛らしさ」を踏まえた判断であろう。会場に設けられたフォトスポットも会場の雰囲気を経やかに演出する。

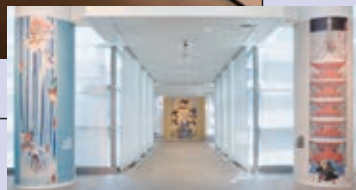
実際、展示室内では作品を前に、楽しみに語り合う観覧者の姿があちらこちらで見られた。国芳らしい、遊びどころが随所にみられる作品を、最高の摺によって堪能することのできる、世界一の国芳コレクションによる展覧会であった。

津田卓子さん Takako Tsuda
名古屋市博物館 学芸課課長補佐。最近の企画展に「もしも猫展」(2022年)など。



歌川国芳展——奇才絵師の魔力

2026年4月24日(金)～6月21日(日)
場所／愛知県美術館



AACクイズ!

© David Rose
ホフェッシュ・シェクター

手掛けたブロードウェイ・ミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』はトニー賞(2016)にノミネート。

詳細は劇場WEBページで!

世界的振付家・音楽家のホフェッシュ・シェクター
愛知初公演にちなんだクイズを出題!

シェクターが過去に目指していた職業は?

答えはページの右側

- 1 映画監督
- 2 ロックミュージシャン
- 3 照明デザイナー
- 4 俳優

ダンス、コンサート、演劇が融合したような
独自の空間を創り出す『Theatre of Dreams』の公演は
10月16日(金)・17(土)に開催。

アート専門の図書館

ART LIBRARY

(愛知芸術文化センター1F)

アートライブラリーは一時休館中です。再開館の時期や再開館後の利用方法等は決まり次第お知らせいたします。ご利用のみなさまにはご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解のほどお願いいたします。

お知らせ

Letter

10月から豊川市桜ヶ丘ミュージアムで開催!

愛知県美術館 愛知県陶磁美術館 移動美術館

移動美術館の
詳細はこちら!



愛知県美術館と愛知県陶磁美術館は、より多くの県民のみなさまにコレクションをご覧いただくため、県内各地に作品を運んで展示する「移動美術館」を毎年開催しています。豊川市で実施する今回は、「花の時間:ちいさきうつくしきもの」をテーマに、モーリス・ドニや熊谷守一の絵画や、ロイヤル・コペンハーゲンやハニー・ハニーの陶磁器を中心に約60点を展示。会期中には記念講演会やギャラリートークも行います。ぜひ会場へお出かけください。

豊川市桜ヶ丘ミュージアム 豊川市桜ヶ丘ミュージアム 豊川市桜ヶ丘ミュージアム

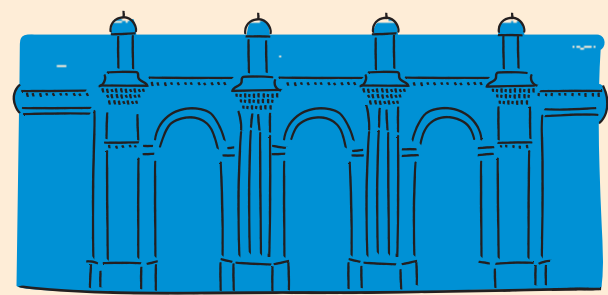
© 愛知県芸術劇場2026 ※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。 ※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。
※掲載内容は2026年8月18日(火)現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。
2026年9月1日号 Vol.129 発行・お問合せ／愛知県芸術劇場(公益財団法人 愛知県文化振興事業団) ☎052-955-5506 e-mail/mkt@aafr.jp(企画制作部)
デザイン／神谷直広、高木若菜(株式会社Rand) 編集／村瀬実希(MAISONETTE Inc.) 印刷／長苗印刷



MORE THEATER

「見る場所」から
「記憶の器」へ

愛知の皆様、ご無沙汰しております。あいちトリエンナーレ2019および国際芸術祭あいち2022でパフォーマンス部門のキュレーターを務めさせていただきました相馬千秋です。2019年は「表現の自由と展」に端を発する劇的な展開、2022年はコロナ禍での特別対応など、イレギュラーかつ濃密な体験をさせて頂きました。7年という年月を経て、なお鮮明に思い出すのは、意外にも作品や会話の中身ではなく、場所に結びついた身体的感覚です。今でも、一番多くの時間を過ごした愛知芸術文化センター／芸術劇場に行く、と胸が高なり、当時の記憶や身体感覚が次々と蘇ってきます。私はこれまで25年ほど舞台芸術プロデューサーとして、世界中の劇場を旅してきました。今の時代、良い作品を探しただけならオンラインに流通する動画や資料で事足りることも多く、現地に行かなくても企画書上のキュレーションは可能です。実際コロナ禍中は多くの作品がそのように流通しました。しかし、そこには観客としての「経験」が欠落します。私が今でも「時間」と資金を投じて遠方の劇場を旅するのは、舞台と客席の間に起こる相互作用や緊張関係、劇場内に充



Navi Opera

満する空気感を体感したいからです。どんな人たちがその作品の観客席を占めているのか、その作品が成立するコミュニティや社会の状況はどうなっているのか。そもそもその劇場はなぜそこにあり、どんな歴史や記憶を刻んできたのか。現地に行けば、それらはネットで検索可能な情報としてではなく、自分の身体を媒介とした体感や経験として理解されます。

近年訪れた劇場で最も印象深かったのは、ウズベキスタンの首都タシケントにある国立ナウオイ劇場です。ウズベキスタン文化の象徴と崇められる15世紀の詩人・思想家アリシエル・ナウオイの名を冠する同劇場は、ウズベキスタンが旧ソビエトの一部であった1947年に開館しました。その建設には終戦後ソ連からウズベキスタンに送られた日本人捕虜たちが携っていた、という史実をウズベキスタン出身のアーティストから聞いた私は、何かに突き動かされるように現地への旅を企画しました。

2024年8月に訪れたナウオイ劇場の外壁には、確かに建設に携わった日本人捕虜たちの功績を讃える碑が刻まれていました。劇場の内部は、ウズベキスタン各地に伝わる伝統的な工芸意匠を取り入れた壮麗な内装で満たされ、宇宙的とも言える装飾紋様の無限の広がりにつながっていました。開館当時のウズベキスタンはソビエト連邦の一部でしたが、もとよりイスラーム化する以前からシルクロードの主要拠点で東西を繋いでいた同地には複数の宗教的、民族的、文化的なレイヤーが織り重なっており、そうした複数の時間から集まる複数の声の静かに囁き合うような神秘的な空間に、私は深く揺さぶられました。

劇場は、そのギリシャ語の語源「テアトロン」が「見る場所」を示すとおり、舞台の上で展開される上演を見る場所、と定義されます。そしてその舞台上では、異なる時代、異なる場所、異なる人々の出来事があったかも知実であるかのよう、に演じられるフィクションのフレームが機能し、観客はそれの前提を受け入れています。劇場はこのような意味でフィクション生成装置であるわけですが、実はもう一つの機能、記憶保存装置としての機能も極めて重要なものです。そもそも誰がそこに劇場を作ったのか、なぜそのようにデザインなのか、その社会がその時代にどんな戯曲を上演してきたか、どんな俳優がどのような演技で観客を魅了してきたか、そこには時代の歴史が深く刻まれています。劇場はつまり、舞台を見るだけではなく歴史や記憶と出会う旅の目的地であると同時に、そこから始まるフィクションの旅の出発点でもある。劇場を旅の目的地／出発点として捉え直すと、私たちは劇場に対してもっとアクティブかつクリエイティブな身振りを引き出すことができるのではないのでしょうか。その時、劇場は「見る場所」から、私たちの身体的な記憶と結びついた「記憶の器」となるはず。

私はこれからますます、「劇場と旅」をテーマにパフォーマンス活動を展開していきたいと考えています。劇場は扉のように、異なる時代、異なる空間、異なる他者へと開かれた旅の目的地／出発点である。そのようなイメージを実現する劇場の企画を、日本はもちろん、アジアや世界各地の劇場やアーティストと共に考案し、実装していきたいと思っています。

相馬千秋 Chiaki Soma
アートプロデューサー、キュレーター、
東京藝術大学大学院准教授



© NOI CREW

あいちトリエンナーレ2019・国際芸術祭あいち2022
舞台芸術部門、シアター・コモンズ2017～、世界演劇祭「アタター・デア・グエルト2023(ドイツ)」などのキュレーションを行う。25年よりみなと芸術センター・m-m(むーむ)開設準備室プログラム・ディレクター。

navigator's
COLUMN

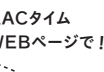
（劇場スタッフが舞台芸術の世界をナビゲート。舞台裏のあんな話やこんな話も！）

「集まれ、未来のオルガニスト」と銘打って取り組んでいる愛知県芸術劇場オルガニスト養成事業。これまでに延べ100名以上が受講してきました。受講生は、月に1回、国内最大級を誇る、あのパイオルガンを使って当劇場オルガニストから直接指導を受けています。大学生など、この春始めた人から継続している人までさまざまな受講生たち。修了試演会では、そんな彼らがそれぞれの成果を披露します。フレッシュな奏者たちの演奏にどうぞご期待ください。

愛知県芸術劇場 企画制作部プロデューサー
関本淑乃



AACタイム(Podcast)で

パイオルガンの持つ魅力を
お話ししていますAACタイム
WEBページで！

2026年9月28日(月)
愛知県芸術劇場オルガニスト養成事業
集まれ、未来のオルガニスト
2026上半期コース 修了試演会

場所／愛知県芸術劇場コンサートホール
時間／19:00～

詳細は劇場
WEBページで！

土に関わる

秋山陽

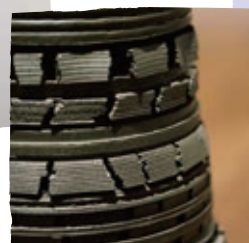
聞き手／愛知県美術館 企画普及課長 副田一穂、
愛知県陶磁美術館 学芸員 入澤聖明
撮影／千葉亜津子



INTERVIEW

秋山陽 AKIYAMA Yo

1953年山口県生まれ。78年京都市立芸術大学陶磁器専攻科修了。初期より黒陶を用いた作品で、現代陶芸を牽引する。現在は、焼成によって現れた動的な土の質感を引き出しつつ、本焼きの後に鉄粉を施して錆びさせる手法で作品を制作。一貫して、自然と人工、生成と崩壊、内部と外部といった関係性を意識し、土と自らの創意との融合を試みている。2018年まで京都市立芸術大学で教鞭を執って後進を指導。

物質の現象×人為的な痕跡
土と時間をかたちに

副 施設での経験を経て、ご自身の制作はどのように変わっていったのでしょうか。

秋 例えば、子どもはきれいな土のお団子ができて喜べるかもしれないけれど、自分はその足で満足できない。「土に何らかのかたちを与えることの切実な根拠とは何だろうか」と途方に暮れてしまったわけです。そのときに、たまたまみかんをいただいたんです。ゴロンとした重さや温かを感じて、「みかんみたいに粘土の皮をむけないだろうか」と思い、実際にやってみることにしました。むける状態にするためにバーナーの炎を当ててみると、表面が硬くなると同時に収縮して亀裂が現れるわけです。それが人が描く線とは違つ、不思議で神秘的なものに見えました。それまでただの粘土だったものが、初めて性格というか、魅力を持つように感じられました。度合いはさまざまですが、素材そのものが発してくるものと、自分の中の意識みたいなところが交わり、溶け合い、あるいは対立する。その両方が見えるようなかたちにしたいという思いは、今でもずっと自分の中にあります。

入 身体スケールよりもっと大きな作品から、広い意味での「土に関わる」ということを感じます。

秋 大学では、先生も先輩も「粘土」ではなく、「土」と呼んでいたことが新鮮に感じられました。土に関わるということは、自分の足元にずっと広がっているものに関わることなんだな、と自然に思えるようになってきたんですね。一方で、やきものって何だろって。土に人為的に手を加え、焼いて化学的に変化させる。それを便宜的な保存のために使うまでには、すぐ時間がかりました。今思うのは、地球上では土が岩になり、岩がまた土になるということが、ゆっくり時間をかけて進行していきますよね。人為的に時間を圧縮することによって、意味があるとするは、それが土をやきものにするここのだろって、徐々に思うようになってきました。

副 ひび割れたパーツも、《準平源921》は球体に沿ったようなカーブを描き、《Pho II》は外側に反っていて、表情が違いますが、それぞれどんな発想から制作されたのでしょうか。

秋 《準平源921》は、円すいの立体物を作って、その表面をバーナーで炙り、ある部分を切り開いています。みかんの皮をむく発想と同様ですね。亀裂の入った面を型に沿うように配置し、その内側を補強しました。《Pho II》は、立体物につきものの作品の底面と床などとの関係を検討することから始まり、ワイヤーで吊るしています。民俗学の本によると、プラタンでは家を新築するときに軒先にベス型の木製品を吊り下げ、それを下でさせる慣わしがあるそうです。天と地を意識して往還するものとして、実際に存在していることがとても面白いと思ったんです。天への力と、重力によって地球へ引かれる力。その両者を一つのかたちの中に表せないだろうかと考えました。ワイヤーで吊るす展示効果を超えて、はるかに大きなテーマにつながる作品になりました。どのように見えるかは、いろいろあって良いと思います。



取材は、愛知県美術館と愛知県陶磁美術館の地方独立行政法人化を記念し、両館のコレクションを取り合わせた企画「コレクション、往来！」にて実施(会期終了)。左から、入澤、副田、秋山。



偶然に近い、かたちで
紆余曲折のやきものづくり

入澤(以下、入) 大学で陶芸の道に入られたきっかけは何でしたか。

秋山陽(以下、秋) 「美術に関わる何かをやりたい」と、美術大学を志したわけですが、具体的に何がしたいかはなかったんです。大学も学費や受験倍率などの現実的な理由で選び、平面より立体かな、という程度でした。陶磁器専攻には八木一夫先生、藤平伸先生などがいらつしやって、クラフトもあれば、オブジェ的な作品もある。彫刻専攻には辻晋堂先生がいらつしやいました。先輩の中には、金属のメッシュで成形して土を塗り込み、さまざまな温度帯で焼成するという制作をされていた吉武賢さんという先生がいました。当時としてはとても新しい表現でした。1970年代前半の大学で幅広いアプローチやさまざまな素材による表現に触れ、

「何かできることがありそうだな」と思って陶芸を選びました。

入 器ではなく、いろいろな表現ができるものとしての陶芸なのですね。

秋 私には、器に関心を持つ経験は特にありませんでした。陶芸の基礎的な技法の訓練も、「やる意味があるのだろうか」と思っていました。ろくろだけは面白かったですね。一つの対象をさまざまな角度から眺めるために歩き回るのは、ろくろは自分の位置は一定で、相手が回転していく。その後の制作に直接つながっていくわけではありませんが、回転する存在に関心を持つようになったのは、ろくろの経験から端を発しているかもしれません。

副田(以下、副) 大学卒業後、広島県の障がい児施設で働き、子どもたちの土の扱い方にもインスピレーションを得られたそうですね。

秋 就職の経緯は、八木一夫先生が若い頃にそのような施設で指導されていたという影響もありますが、大学とは違う世界を見てみたいという気持ちもありました。

当時参加していた走泥社(※)のメンバーは、陶芸を家業とされる方がほとんどでしたが、自分には全く縁がなくて、あらゆる点で行き詰まっていたというか。もう、やきものはやめようかなという気持ちもあつた。別業種の紹介された仕事に就きました。施設ではやきものの時間があつた。経験者だから」と任せましたが、重度の障がいのある子どもたちに授産を目的とするものづくりをさせることは難しい。そこで、土と戯れて遊ぶ時間にしたら、子どもたちの土との関わり方は、私が学んできたものとは全く違つて、とても刺激的でした。そこで、「一旦離れたやきものにもう一度関わる」としたら、これまでやってきたことを忘れて、一から自分なりのアプローチを見つけないといけない」という考えになり、いろいろな土の実験を始める過程で、今につながることを少しずつ見出していたという感じでした。

※1948年に京都府八木一夫、鈴木治、山田光治が結成した前衛陶芸家集団。器としての用途や伝統的な形式にとらわれず、陶による造形表現を追求し、戦後日本の陶芸に新たな方向性を切り開いた。